

# 生涯学習社会における美術館

高久 裕一郎

## 【目次】

はじめに

### I 生涯学習社会と美術館

#### 1 生涯学習社会へ

- (1) 生涯教育と生涯学習
- (2) 生涯学習社会とボランティア

#### 2 美術館とは

- (1) 美術館の成立
- (2) 美術館の役割・機能

### II 美術館での教育の現状とボランティア活動

#### 1 美術館における教育普及活動とボランティア活動

- (1) 水戸芸術館
- (2) 東京都現代美術館
- (3) 東京都写真美術館
- (4) 世田谷美術館
- (5) 目黒区美術館
- (6) 横浜美術館
- (7) 山梨県立美術館

#### 2 美術館での教育

- (1) 美術館教育の意味
- (2) 美術館教育の方法と分類

### III 生涯学習社会と美術館の役割

#### 1 美術館に求められている役割と課題

- (1) 開かれた美術館へ
- (2) 美術館でのボランティア活動

#### 2 これからの美術館

- (1) 美術館の未来
- (2) 生涯学習社会における美術館像

註・参考文献・参考資料

はじめに

今日的な意味での「生涯教育」という考え方がはじめて提起されたのは、昭和40年（1965）ユネスコの「成人教育国際委員会」においてである。会議の成果は議長のポール・ラングランたちによって「ワー

キング・ペーパー」に盛り込まれ生涯教育についての活発な論議が各国に波及していった。またラングランは昭和45年（1970）『生涯教育入門』を著し、その後の生涯教育論に理論的、政策的影響をもたらす原型を用意した。

そこには、従来の教育理念を革新しようとする意図が見られその原理は、人生の段階それぞれにふさわしい学習の機会が継続的に確保されるような時間的（垂直的）統合と、その学習の機会が学校だけでなく、家庭、職場、地域社会など生活のあらゆる場で確保されるような空間的（水平的）統合である。加えて「自己形成し自己教育し、進歩するという人間存在の恒常的かつ普遍的な要求を考えに入れた新しい教育理念」<sup>1)</sup>の必要性を述べている。

この生涯教育論が、社会的に論議され受容されたのは、次のような背景が考えられる。

- ①新しい社会生活、職業生活、家庭生活への適応能力や創造的能力の育成という社会的要請および個人的必要
- ②生きがいの欲求・自己実現欲求の高まり
- ③学校教育、さらには教育の全体系までも根本的に改革可能な新しい教育原理の待望

我が国でもその後、生涯教育について研究が重ねられ、理念の具体化のため各種の審議会による答申が出され、最近では平成8年（1996）に生涯学習審議会が『地域における生涯学習機会の充実方策について』答申し現在に至っている。この答申の中で美術館を「地域住民の多様な学習ニーズにこたえ学習機会の提供をする施設」のひとつとしてとりあげている。

近年各地に美術館が建設され、都道府県レベルの美術館新設は一段落し、市区町村の段階で進行している状況である。最近の傾向としては私立や純粋の公立美術館以外に、第三セクター方式も見られ、各地でさまざまな展覧会が開催されている。

本稿では、以上の状況を踏まえ、日本各地に建設

された美術館が生涯教育（学習）という視点から見て、どのように教育活動に取り組んでいるのかを問題の中心に据えて考察したい。第1章の前段で我が国における生涯教育や生涯学習の考え方や生涯学習社会をめざす意味を、後段で美術館について考えてみる。第2章で美術館における具体的な教育普及活動やボランティア活動の現状をとりあげ、それらをもとに美術館における教育についてまとめ、第3章では現代に求められている美術館の役割や課題、今後の可能性について探してみたい。

なお、本研究の貴重な機会を与えていただいた栃木県教育委員会並びに研修の便を図ってくださった宇都宮大学生涯学習教育研究センターに感謝したい。また、副センター長瀬沼克彰先生にはていねいなご指導を賜り謝意を表したい。加えて、多忙な中、取材や資料提供にご協力をいただいた栃木県立美術館、宇都宮美術館、水戸芸術館、東京都現代美術館、東京都写真美術館、世田谷美術館、目黒区美術館、横浜美術館、山梨県立美術館の担当者にもお礼申し上げたい。

## I 生涯学習社会と美術館

### 1. 生涯学習社会へ

ユネスコによって提起された生涯教育の理念が、我が国で、どのように検討され実現のための条件がどう整備されてきたのかを、各種審議会答申等をもとに概観し、生涯教育や生涯学習の考え方、生涯学習社会をめざす意味、ボランティアや美術館について考えてみたい。

#### (1) 生涯教育と生涯学習

昭和47年（1972）社会教育審議会が『急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について』答申し生涯教育の観点から社会教育を中心に学校教育や家庭教育との有機的な統合を目指すよう教育全体の再検討を迫った。またOECD（経済協力開発機構）も昭和48年（1973）『リカレント教育－生涯学習のための戦略－』の報告書をまとめリカレント教育<sup>2)</sup>の必要性を提言している。

このような経緯を踏まえ、昭和56年（1981）中央教育審議会は『生涯教育について』の答申で生涯教育を「国民一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるために、教育制度がその上に打ち立てられるべき理念である。」と位置づけた。また生涯学習については「今日、変化の激しい社会に

あって、人々は、自己の充実・啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的意志に基づいて行うことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これらを自ら選んで、生涯を通じて行うものである。」としている。

昭和60年（1985）から昭和62年（1987）にかけての臨時教育審議会『教育改革に関する第1～4次答申』では、従来の教育を提供する側の立場の生涯教育から、学習者の視点に立った生涯学習の考えかたに重点を置いて提言を行うとともに、教育改革の視点として 個性重視の原則 生涯学習体系への移行<sup>③</sup>変化への対応を掲げている。そして、我が国が今後、社会の変化に主体的に対応し、活力ある社会を築いていくためには、学歴社会の弊害を是正するとともに、学習意欲の新たな高まりと、多様な教育サービス供給体系の登場、科学技術の進展などに伴う新たな学習需要の高まりにこたえ、学校中心の考え方を改め、生涯学習体系への移行を主軸とする、教育体系の総合的な再編成を図ることを提言している。

平成2年（1990）中央教育審議会は『生涯学習の基盤整備について』答申しているが今後の生涯学習を推進するにあたっての次の留意点をあげている。

生涯学習は、生活の向上、職業上の能力の向上や、自己の充実を目指し、各人が自発的意志に基づいて行うことを基本とするものであること。

生涯学習は、必要に応じ、可能な限り自己に適した手段及び方法を自ら選びながら、生涯を通じて行うものであること。

生涯学習は、学校や社会の中で意図的・組織的な学習活動として行われるだけでなく、人々のスポーツ活動、文化活動、趣味、レクリエーション活動、ボランティア活動などの中でも行われるものであること。

また、この答申では国や地方公共団体が生涯学習の基盤を整備し、人々の生涯学習を支援することを期待し、生涯学習の推進体制、地域における中心機関、重点地域、民間教育事業の支援の在り方等について提言を行っている。この答申を受け、平成2年（1990）「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法

律」が生涯学習体系への移行という時代の要請にこたえるために制定された。

この法律により生涯学習審議会が設置され、平成4年(1992)『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について』答申した。

## (2) 生涯学習社会とボランティア

平成4年の生涯学習審議会答申では、生涯学習の必要性の社会的背景として次の点をあげている。

○科学技術の高度化 ○情報化 ○国際化  
○高齢化 ○価値観の変化と多様化 ○男女共同参画型社会の形成 ○家庭・地域の変化

答申では、このような背景の中から豊かな「生涯学習社会」を築いてゆくことを目指しており、ここで「生涯学習社会」を「人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価されるような社会」と定義づけている。

また、生涯学習とボランティア活動との関連を、次の3つの視点からとらえており生涯学習社会の形成を進める上で、ボランティア活動の重要性を述べている。

1. ボランティア活動そのものが自己開発、自己実現につながる学習活動となるという視点。
2. ボランティア活動を行うために必要な知識・技術を習得するための学習として生涯学習があり、学習の成果を生かし、深める実践としてボランティア活動があるという視点。
3. 人々の生涯学習を支援するボランティア活動によって、生涯学習の振興が一層図られるという視点。

生涯学習審議会は平成8年(1996)『地域における生涯学習機会の充実方策について』答申している。この答申では、地域社会の中で様々な学習機会を提供している機関や施設を四つの類型(高等教育機関/初等中等教育諸学校/社会教育・文化・スポーツ施設/研究・研修施設)に分け、生涯学習機能の充実という視点から検討を加えている。そのうちの第3番目の社会教育・文化・スポーツ施設について、とりわけ“地域住民のニーズにこたえる施設”という観点から、その一つとしての「美術館」等の充実と活性化がとりあげられている。同時に、住民参加やボランティア活動の拡充が望まれるとし

ている。

また中央教育審議会は平成8年(1996)『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』第1次答申を行った。この答申では、第1部で子どもたちの生活や家庭・地域社会の現状と、これからの教育の在り方について、第2部でこれからの学校・家庭・地域社会の役割と連携の在り方について、第3部で国際化、情報化、科学技術の発展、環境の問題等の社会の変化に対応する教育の在り方について述べている。特に第2部の中で、地域社会の文化施設の整備・充実として「美術館」等がとりあげられ新たな事業展開の必要性や、ボランティア活動の推進も指摘されている。

以上、各種答申を通して、社会の変化を背景にした教育改革の中で「生涯教育」「生涯学習」についての考え方や生涯学習体系へ移行する意味を概観してきた。また、生涯学習社会を築いていく中で、施設としての美術館の充実や、ボランティア活動の重要性が指摘されていることも見てきた。

## 2. 美術館とは

前節では各種答申の中で「美術館」を、生涯学習社会を築いて行くための施設というとらえ方をしていることをみた。本節では広く成立、役割、機能などをもとに美術館そのものを考えてみたい。

### (1) 美術館の成立

はじめに、美術館の設置や運営に関して法的な立場から見てみよう。ここで関係する法規は「教育基本法」「社会教育法」「博物館法」「博物館法施行規則」「公立博物館の設置及び運営に関する基準」等があるが、最も関係の深い博物館法では次のような定義となっている。『「博物館」とは、歴史、芸術、民族、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む)し展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関(公民館・図書館を除く)・・・』

また、総合博物館、人文系博物館、自然系博物館という収集資料別の分け方や登録博物館、博物館相当施設、その他博物館類似施設という法規上の分類もある。なお、これらの具体的な博物館の数については第3章で取り上げたい。

このように法的には「美術館」は「博物館」の一分野で「美術」に関する資料を収集、保管、展示、調査研究の事業を行うものとされている。

歴史的に見ると、「美術」という“ことば”は芸術を意味する明治の新語であった。明治6年(1873)ウイーン万国博覧会に明治政府が参加した際、太政官布告に添付された規約の訳文として見られる。また我が国における「美術館」という名称の初めての使用は、明治10年(1877)第1回内国勸業博覧会において展覧会のため特設された煉瓦造りの建物につけられたものである。ただしこの建物は博覧会終了後博物館の付属建物として吸収されている。<sup>3)</sup>

これは明治政府が新国家建設のために、西欧から取り入れたさまざまな制度をつくったが、その一つとして「美術」や「美術館」があったことを示しており、殖産興業策の一面も持っていた。

明治期には博覧会を開催するための施設として、国立の博覧会会場が建設されて、現在の国立博物館のもととなった。

一方、私立の博物館としては、文化財の海外流出を防ぐために、大正6年(1917)大倉集古館が開館した。その後、大原美術館(昭和5年)徳川美術館(昭和10年)根津美術館(昭和15年)の開館と個人コレクションの公開が始まり、戦後もコレクションを核として運営されている。

また公立の美術館としては、陳列場の確保という美術家たちの切実な要求から大正15年(1926)東京府美術館(現・東京都美術館)が開館した。新館ができるまで(昭和50年)の長い間各種美術団体に展示場を貸す「貸しギャラリー」であった。第2次大戦後、昭和26年(1951)鎌倉に神奈川県立近代美術館が開館した。開館当初収蔵品が少ないため企画展をもって意欲的な展示活動をし、後の公立美術館運営に大きく影響を与えた。1970年代から80年代に入ると日本各地に大規模な公立美術館が建設され「美術館ブーム」とまで言われるようになった。

このように明治期に日本の近代化のための制度として西欧から移入された「博物館・美術館」であるが、そもそも西欧ではどのような成立をしたのであろうか、その概略を見てみよう。

用語の上でmuseumは博物館・記念館・美術館等と訳され、ギリシア語のmouseionを語源とし、これは学芸を司る神々ミューズの神

殿に由来するものである。Museumという語が「コレクション」という意味と「コレクションを保存する場所」という意味を二重に担うようになったのは16~17世紀以降のことで、それまではキャビネとかクンストカマー、ヴンダーカマーなどと呼ばれる宮殿や邸宅などの特別な部屋が王侯貴族らのコレクションの収蔵場所であった。美術品や記念品が集積されてきた教会や宮殿が宗教的、政治的儀礼の場であることをやめるとき、そのまま公共のコレクションとして公開され美術館となった例がヨーロッパでは多く見られる。

また革命などの政変によって人為的・制度的に形成された公共美術館の例も見られ、ループル美術館等が代表的なものである。創立年代は新しくなるが、個人コレクションの創設者が死後、故郷や国家・宗教施設に寄贈し、美術館を創設するという形がアメリカ合衆国では重要な役割を果たした。一方ひとつの組織がコレクション全体を購入することで美術館をつくった場合もある。<sup>4)</sup>

このように美術館は、近代市民社会の中で公共財としてのコレクションをもって美術と社会とを媒介する社会的機能を果たす役割を持ち、美術の概念や様相そのものにも関連しながら形成されてきたのである。

## (2) 美術館の役割・機能

現在各地に多くの美術館が建設され事業が行われている。成り立ちはさまざまに独自の活動を行っているが、それらの中から基本とも言える4つの事業(①展覧会②収集・保管③調査・研究④教育・普及)についてとりあげてみよう。

①展覧会  
美術館での主要な活動のひとつは「企画展」を実施することである。期間限定で、あるテーマ(作家、ジャンル、年代・・・)のもとに作品があつめられ展示される。複数の作品が集まった形で観衆にメッセージを発しており、展覧会を興味深くするか、つまらなくするか、企画がポイントとなる。特に現代では、作家の表現形態や、とりあげる作品の範囲も広がっており「美術」の持つ概念の多様性を反映して、展覧会も多種多様な企画のもとに開かれるようになった。作品を公開し、それに対して鑑賞者が批評を加え、コミュニケーションの場をつくることが展覧会の役割のひとつである。

## ②収集・保管

美術館の行う事業として作品の収集や保管がある。収集方法として購入・寄贈・寄託・借用がある。これら「もの」や「情報」は公開展示を前提として保存をしなければならないという難問をかかえ、事故や盗難、ホコリや大気汚染等に対する対策も重要である。これらのコレクションは「常設展」という形で発表されることが多く、そこには美術館の基本的な性格や考え方が表れてくる。

## ③調査・研究

美術館で働く学芸員の仕事として、アカデミックな学術研究のみでなくフィールドワークに至るまで、美術館活動を支えるものとして自主的な調査・研究活動は重要である。研究成果を展示（企画・常設）や収集、教育普及活動へ還元させて行くことが必要である。

## ④教育・普及

展覧会での観衆の鑑賞を支援することや収藏品、調査研究で得られた情報、美術館の人材・施設設備等を有効に生かした“人を育てる”活動であり、美術や美術館を理解してもらうための観衆とのコミュニケーション活動でもある。美術館の事業として、今後重要性が増してくる。この点については以下の章で考察したい。

## II 美術館での教育の現状とボランティア活動

### 1. 美術館における教育普及活動とボランティア活動

前節では美術館の成立とその一般的な役割・機能について見てきた。ここでは以下に我が国の比較的最近できた特色のある活動をしている美術館等についてその実態を、次の4点にしぼり各施設の出版物や担当者からの聞き取り等をもとに眺めてみたい。

①成立の概要 [どのような経緯で建設されたのかその理念等を含め基本的な性格を探る]

②施設の概要 [建物や施設にどのような特徴があるのかを探る]

③教育普及活動 [教育や普及のための具体的な活動の様子を探る]

④ボランティア活動 [生涯学習社会をめざす中で美術館におけるボランティア活動の状況を探る]

#### (1) 水戸美術館

##### ①成立の概要

水戸美術館は水戸市制100周年記念施設として平成2年（1990）3月開館した複合文化施設である市の中心部にあった五軒小学校が移転しその跡地（約1.4ヘクタール）を整備するため昭和61年次のような方針がたてられた。「五軒小学校跡地については、21世紀に向けて、水戸市の新しい都市の核の形成を図るべく、広場、文化施設、地下駐車場及び周辺地域整備の一部を市制100周年（昭和64年）を目途に整備を行うこととし、その他の周辺地域整備については、長期的視点のもとに、段階的な計画をたて、継続的に整備を行うことを基本方針とする。」<sup>5)</sup>

これを受け芸術館運営会議が開催され、コンサートホール・劇場・美術館が有機的に結びついた形で芸術文化を享受、創造する一つの場となり、芸術文化の振興につながるようにと、次のような芸術館運営基本構想が発表された。

##### 基本理念

###### ○新しい芸術文化を創造する芸術館

芸術館は、既成の評価、ジャンルにこだわらず、独自の視点に基づいて活動を行い、未来へ向けて新しい芸術文化を創造する。

###### ○国際的な視野に立って芸術文化の交流を行う芸術館

芸術館は、国内はもとより、国際的な視野に立って芸術文化の交流を行い、市民の文化意識の向上と日本の芸術文化の振興に貢献する。

###### ○楽しみながら考える芸術館

芸術館は、幼児から高齢者まで、構えることなくいつでも立ち寄り、それぞれが楽しみながら芸術文化に親しみ、その意味をかんがえられるような場となる。

###### ○市民の芸術文化の拠点となる芸術館

芸術館は、市民の芸術文化の創造及び発表の機会の提供を行うなど、市民芸術文化活動の拠点となる。

###### ○都市の活性化に寄与する芸術館

芸術館は、市民の芸術文化の中心としてはもとより、都市の核として各種機能、また、まちづくりと連携して活動を展開し、都市の活性化に寄与する。

##### 基本とする事業

○企画事業 ○教育普及 ○調査研究 ○作品、資料の収集<sup>6)</sup>

特に美術部門の事業運営の特色は、次の通

りであった。[記者発表(1989.9)による]

現代美術ギャラリーでは、①新しい文化の創造、②視野を広く持った活動、③楽しく美術に接する場となること、④地域の文化・芸術活動との関わり、を念頭に置いた上で、基本事業として次の3つを行います。

#### 企画事業

「ものを見るとはどういうことか」を基本に企画を行っていきます。建築・工芸・デザインその他の分野も含めて、美術を広く考えます。市民の創造活動を活発化するための企画を行います芸術館の空間内にとどまらず、市民生活の日常的な空間を使った企画も行っていきます。

#### 教育普及活動(ワークショップ)

現代美術ギャラリーでは、来館者のより積極的な鑑賞・批評活動をサポートし、作品理解の新しい回路を獲得する活動として教育普及活動を位置付け、さまざまな企画を実施します。

#### 作品収集

作品収集は、戦後(1945以降)に制作されたものに限り、収集の対象は、平面作品、インスタレーションを含めた立体作品、映像・写真による作品、その他の関連記録の資料とします。まとまったコレクションは急がず、作品は少しずつ収集していきます。

#### 調査研究

自主企画及び運営のために、必要な調査研究を行います。<sup>7)</sup>

設計は「磯崎新アトリエ」が担当し、事業総額約104億円に上り建物は平成2年竣工した。館の運営、企画事業および財政管理は「財団法人水戸芸術振興財団」がおこない水戸市総予算の1パーセントを芸術館の管理運営費に充てている。

#### ②施設の概要

○塔[水戸芸術館のシンボルで高さが100メートル、展望室が86.4メートルのところにある。正四面体の組み合わせでできた三重螺旋の塔。]

○エントランスホール[ACM劇場、コンサートホールATM、現代美術ギャラリーに訪れる人のための共通の玄関ロビーとして計画され、日本人の手になるものとしては最大規模

のパイプオルガンが設置されている。]

○コンサートホールATM[上げた掌の真ん中にステージを置いたような形のホールで座席数は620~680。天井は3本の大きな大理石の柱で支えられている。]

○ACM劇場[3層の客席が張り出し舞台を取り囲む12角形の劇場で座席数は472~636。]

○現代美術ギャラリー[大きさ、光の状態、縦横の比率がそれぞれ異なった部屋の連続でできており展示室は9室ある]

#### ③教育普及活動

ここでの活動は、展覧会をもとにした活動や、個別のワークショップ、講座形式とさまざまな形で行われている。一例として「ダニエル・ビュレンス展」と平行して「ダンスパフォーマンス」「トーク・ショー(座談会)」「ギャラリー・コンサート」等が行われた。<sup>8)</sup>

また個別のワークショップとしては1995年の4月から5月の毎土曜・日曜にかけて行われた「相談芸術大学」というものがある。内容は学芸員やアーティストが理事や学長・教授に扮しボランティア職員も含め大学を開学し学生(ワークショップの参加者)を募集し芸術館の施設を使って“相談”しながら作品を仕上げていくというユニークな試みであった。また小学生を対象として「アバカノヴィッチ探検隊」(1991年8月)、小学生・中学生を対象とした「奇々怪々楽器団」(1993年8月)等があげられる。

講座としては「水戸芸術館現代美術センターセミナー」が1994年から1995年にかけて5回の日程で行われた。内容は「芸術とは何なのか」「創造(性)の歴史」「作品の見方について」「現代美術の現場より」であった。

#### ④ボランティア活動

水戸芸術館現代美術センターでは「美術教育ボランティア」がギャラリートークを主な活動の場として活躍している。「美術教育ボランティア」の募集が始まったのは平成4年(1992)である。水戸芸術館の「美術教育ボランティア」に対する考えかたや募集の方法、現在までの様子を募集要項等をもとに眺めたい。

欧米の美術館を訪ねると係の人が展示されている作品について来館者と楽しく語りあっていたり子供たちが車座になって作品の謎解きに真剣な表情をしていたり・・・こうした

光景をしばしば目にします。これらの活動は日常的なもので、しかもその多くはインターネットと呼ばれる学生や専門のボランティアによって支えられているのです。美術館にはそうした学生やボランティアの人が“美術”を分かりやすく学ぶためのプログラムが用意されており、彼らは美術館を自分の研究の場として十分に利用しながら、一方そこで得た専門的な知識を他の多くの来館する人たちに生かしているわけです。しかしながら、美術館の歴史がまだ浅い我が国においては、このような美術館環境の整備・実現が立ち遅れていることも事実でした。しかし、そんなに難しいことなのでしょうか？

答えは否、と考えます。特に「現代美術」は、誰にでも共通の“今”をその題材としており実は大変身近で親しみやすいものです。ほんの少しのアドバイスやヒントがあれば、誰もが様々な美術作品の世界へ入っていただけるのです。このような、現代美術と来館者との橋渡しをするスタッフ、それが『美術教育ボランティア』です。現代美術と展示作品、そしてミュージオロジー（美術館学）を分かりやすく体験的に学びながら、芸術館スタッフと共同で来館者とのコミュニケーションの現場を作り上げてゆくこのシステムは、開館3年目を迎える水戸芸術館現代美術ギャラリーの、日本の美術館活動への新しい提案でもありません。

最初から専門性を問うものではありません。経験は不問。むしろ、素朴な好奇心と意欲を募集いたします。

活動内容 [現代美術ギャラリーの来館者に対する美術鑑賞教育（ギャラリー・トーク、展示ガイドの作成等）]

応募条件 [年令：20歳以上、性別：不問 現代美術や美術館教育に興味があり、土・日を含む週2日程度の参加が可能であること。]

特典 [特別美術研修講座への参加、展覧会入場無料、展覧会カタログ他刊行物の無料提供など。]

募集人員 [10名程度]

応募方法 [(1)論文、(2)応募申込書の提出]

以上の形で募集したが70名をこえる応募があり書類と面接の慎重な審査の結果17名が採用された。ボランティアに対しては、現代美術に関

する特別研修講座（芸術館の仕事／西洋美術の変化／20世紀の表現／教育普及活動……）を受講させている。平成6年（1994）追加募集等で、二期生を加え若干の出入りもあり現在16名で編成されている。内訳は男性が10名女性が6名で、年令は20歳代が3名、30歳代が6名、40歳代が2名、50歳代が2名、60歳代が3名とバランスがとれている。居住地域では水戸市内が6名と多いが、他に茨城県内8名、神奈川県1名、京都府1名である。

活動は月に1回程度の定例会での話し合いをもとに、研修等も含め自分たちの活動は自分たちで考え、自主的に決定して行こうとする姿勢が見られる。ボランティア応募の動機は美術に親しみたいということもあるが、人との交流や自己開発をも求めているようだ。

またここでは美術教育ボランティアが中心になって『水戸芸術館現代美術センター美術教育ボランティア通信168—いろは』を編集出版している。B5判8ページ（B3判両面刷り）の紙面に展覧会の案内や学芸員の紹介、美術教育ボランティアからのメッセージ等が盛り込まれ平成6年（1994）に第1号が発刊され以降現在に至っている。第6号（1996年10月発行）では「私達、美術教育ボランティアについて」という特集を組んでいる。主な内容は「ボランティアに関する活動の記録、プロジェクト紹介、アンケートより」となっている。

なお、水戸芸術館では美術部門の名称を平成5年4月1日より「現代美術センター」と改め、「現代美術ギャラリー」の名称は展示スペース施設として継続して使用することとなった。本稿の記述の中に両名称が混在しているのはそのためである。

## (2) 東京都現代美術館

### ①成立の概要

東京都現代美術館は平成7年（1995）3月都立木場公園内に開館した。東京都には、現代美術の状況が体系的にわかる常設の展示会場がなかったため、都民や内外の美術関係者から、首都東京に現代美術の動向を知ることのできる美術館を建設すべきであるとの強い要望があった。これを受けて、昭和60年に設置された「東京都新美術館建設構想懇談会」から、美術を通じて国際的な文化交流の一つの拠点となるような現代美術館を建設すべきであると提言がなされた。

東京都現代美術館は、この提言を踏まえ、現代美術を中心とする美術作品や関連資料を収集・保管・展示して、都民が優れた美術作品に接する機会と交流活動の場を拡大し、東京都ひいては日本の美術の振興をはかり、もって、芸術文化の基盤を充実させる意図の下に建設された。

ここでは次の5つの活動領域がありそれぞれ特徴のある活動をしているが、その考え方や特徴をパンフレットをもとに記しておく。

#### 1. 展覧会企画

近代・現代美術を中心に、幅広い時代・テーマ・ジャンルを扱った多彩な企画展を開催していきます。国際的にも注目される高度な内容の展覧会を、日本最大級の展示室を活かし、楽しく親しみやすいかたちで紹介します。

#### 2. 作品収集／常設展示

常設展示では、戦後50年におよぶ国内外の現代美術の歴史を、充実したコレクションから精選された代表作によって、わかりやすく体系的に紹介します。これは、日本で初めての試みであり国際的にも大きな意義を持つものです。

#### 3. 美術情報センター

ハイビジョンシアター・ビデオブース  
120インチのハイビジョン・スクリーンを見ながら、美術を映像で学ぶことができます。ビデオブースでは好みのビデオソフトを選んでご覧になれます。

#### 検索コーナー

当館で収蔵・出品した作品・作家のデータベース約一万件から、文字や画像の情報を検索することができます。

#### 美術図書室

六万五千冊の美術関連図書・カタログおよび約二千タイトルの雑誌を揃えた日本最大規模の美術図書室です。

#### 4. 美術館教育

あらゆる来館者が気軽に現代美術と対話できるように、美術と人をつなぐ架け橋となります。来館者の知的好奇心や学習ニーズを充分にくみとり、ギャラリートークをはじめ国際シンポジウムや多彩な美術講座・イベントを積極的に展開し、より深い鑑賞体験へと導きます。また、学校教育と連携した鑑賞プログラムを計画していま

す。

#### 5. 調査研究

他の活動を支える基本的な活動です。常に新しい美術の動向に目を向け、国際的な視野も兼ね備えた観点から様々な調査や研究を行うことによって、より充実した多様な美術館活動を展開していきます。

#### ②施設の概要

主要構造は鉄骨鉄筋コンクリート造地上3階地下3階で、敷地面積は約23000である。

主な施設内容は次の通りである。〔( )内の数字は面積で単位は平方メートル〕

常設展示室 (約3000 [2層])、企画展示室 (約4000 [3層])、収蔵庫 (約3100)、美術情報センター (約2600)、講堂 [200席]、研修室及びスタジオ (約600)

#### ③教育普及活動

常設展示作品のセルフガイドは手頃な大きさで、内容が充実している。まとめると一冊の書籍になるように編集されている。その他、教育普及活動として代表的なものをあげておく。

#### ワークショップ

##### 『大江戸みこし』

日時：平成8年3月20日／23日／24日

募集人数：50人 対象：小学校3年生～6年生

参加費：無料

#### パフォーマンス

##### 『六十年代－日本の音・行為』

日時：平成8年3月17日

場所：企画展示室アトリウム (座席数50)

#### MOTフィルム・ショー＋パフォーマンス

##### 『フィリピンふんどし 日本の夏』

日時：平成8年9月7日／8日

場所：講堂

#### MOTフィルム・ショー&レクチャー

##### 『ポール・マッカシー&マイク・ケリー』

日時：平成8年11月23日／24日

場所：講堂

#### 講座

##### 『MOT美術館講座』

1つのテーマに沿って4人の講師がそれぞれの講座を受けもつ。場所は東京都現代美術館講堂、募集人員は200名、金曜日の午後7時から9時まで実施。

以下が各回のテーマと日程である。



第1回「現代美術事始め—現代美術学入門」

平成7年7月21日／8月4日／8月11日  
／8月18日

第2回「現代美術の流れ—1／戦後日本の  
前衛」

平成7年9月22日／10月6日／10月20日  
／10月27日

第3回「現代美術学入門／名作誕生の物語」

平成7年11月10日／11月24日／12月8日  
／12月15日

第4回「現代美術の流れ—2／戦後世界の  
潮流」

平成8年1月19日／2月2日／2月16日  
／2月23日

第5回「アーティストとは何か？」

平成8年5月24日／5月31日／6月14日  
／6月28日

第6回「都市漫遊」

平成8年8月23日／8月30日／9月6日  
／9月13日

第7回「名作誕生の物語 Part. 2」

平成8年12月13日／12月20日平成9年1  
月24日／1月31日

美術図書室

美術に関する専門図書館。近・現代の美術に  
関する図書資料を中心に収集・保存し一般に公  
開している。東京都美術館時代から収集した図  
書を中心に美術関係図書約30000冊、展覧会カ  
タログ38000冊逐次刊行物2000タイトル、その他マ  
イクロ資料、ポスター、チラシ等の蔵書がある。

④ボランティア活動

東京都現代美術館では、平成7年（1995）6  
月にボランティアの募集を開始した。募集要項  
による募集概要は次の通りである。

1. 活動内容 [常設展の作品解説・団体観覧  
者へのオリエンテーション等。]
2. 募集人員 [20名～30名程度]
3. 応募条件 [18歳以上の都民／現代美術に  
興味があり、かつボランティアとして積極  
的に活動する意欲のある方。／8月から来  
年3月末までの研修に参加できる方。／ボ  
ランティアとして、月に2～3回活動でき  
る方／無報酬で活動できる方。]
4. 研修内容 [養成講座（10時間程度）／一  
般向けの「美術講座」（15回）]
5. 選考方法 [応募多数の場合は提出書類に

より選考し、40名程度を選考し、後日面接  
により30名程度の方をボランティア候補者  
として認定し、研修を実施します。研修終  
了後、4月から登録いたします。]

約1ヶ月後に締め切ったが、応募が約600名  
あったため男女別、年齢別に抽選をして、80名を  
選考し、一般向け美術講座、2回のレポート終  
了者の26名を最終的に登録した。その中から世  
話役として2名が予定表の作成や、各ボラン  
ティアへの連絡等に当たっている。

具体的な活動内容は以下の通りである。

◎常設展示ギャラリートーク○毎週火、水、  
木、金曜日15～16時、1名 ○毎週土、日、  
祝日、①14時～15時 ②16時～17時、2名

このように、住民のボランティアへの関心は  
高く、活動は始まったばかりで試行錯誤の段階  
であると思われる。生涯学習とボランティアの  
観点からも今後どのように定着し発展して行く  
のか大いに期待したい。

③ 東京都写真美術館

①成立の概要

東京都写真美術館は我が国で初めての写真と  
映像に関する総合的な専門美術館として平成7  
年（1995）1月に恵比須ガーデンプレイス内に  
総合開館した。昭和61年（1986）第2次東京都  
長期計画で「写真文化施設の設置」が発表され、  
平成2年（1990）1次施設が開館し、平成6年  
（1994）建物が竣工した。

その基本的性格は次の通りである。

1. 写真の総合的専門美術館として、収集、  
展示、保存、調査、研究、普及などを含め  
た総合的な活動を行う。
2. 写真芸術・文化を普及するために、人び  
とが気軽に優れた写真作品を鑑賞し、学ぶ  
とともに美術館の諸機能を積極的に享受で  
きるような開かれた施設とする。
3. 写真に関するあらゆる情報を集約すると  
ともに、写真を含む映像全般に関する調査・  
研究を行う。
4. ワークショップなど参加型機能を持つと  
ともに、人びとの創作活動をサポートする  
施設として国内外の写真作家や人びとが広  
く交流しうる場を備える。
5. 日本における写真文化のセンター的役割  
を果たすとともに、国際的な交流の拠点と  
なることを目指す。

6. 写真表現の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘し、新しい創造活動の展開の場とする。
7. 歴史的な映像文化に関する展示と最先端の映像表現を体験的に享受できる「映像工夫館」を併設し、映像メディアの発達の歴史を学ぶとともに、多様な表現の可能性を探る。

事業内容は以下の通りである。

1. 展覧会事業 [企画展、常設展、映像工夫館展及び講演会の開催]
2. 普及事業 [東京国際写真ビエンナーレ、ワークショップ、ギャラリー・オリエンタリングの実施など]
3. 作品資料収集 [写真及び映像の作品・資料、写真の機材などの収集、保存]
4. 出版事業 [展覧会図録等の出版]
5. 広報事業 [写真美術館ニュース、概要、年報、リーフレットなどの発行]
6. 情報システム [館収蔵作品などにかかわる情報の提供]
7. 保存科学研究 [作品・資料の保存、修復の研究]
8. 図書閲覧室 [図書、資料などの閲覧・情報提供]
9. プリントスタディールーム [館収蔵写真作品の閲覧]<sup>10)</sup>

## ②施設の概要

主な施設は次の通りである。[( )内の数字は面積で単位は平方メートル]

常設展示室 (495)、企画展示室 (495)、映像展示室 (532)、ホール [講堂] (283)、図書閲覧室 (121)、書庫 (207)、収蔵庫 (170+176+176)、アトリエ [創作室]、アトリエⅡ [学習室]

## ③教育普及事業

美術館内部 (普及係) で第1次開館時から展覧会以外に、教育的プログラムの必要性を主張しワークショップを実施したりティーチャーズガイドの作成等をしてきた。その結果、全面開館の時には教育プログラムの予算がつけられ、スタッフも増えたという。来館者向けに、企画展や映像工夫館の鑑賞の手がかりとなる「ワークシート」を編集、発行している。ここでの印刷物は全般に工夫されたものが多い。

主なワークショップについて、「ワークショッ

プ・インフォメーションvol. 5」(1996年7月発行)をもとに紹介してみよう。なお参加費はすべて無料である。

### 『フォト・エッチングー

写真と版画の素敵な関係』

《PS板 [ジंक板] を腐食して版を作り  
フォト・エッチングに挑戦する。》

一般コース 日程 1996年7月20日21日

定員20人

親子コース 日程 1996年7月27日28日

定員10組 (20人程度)

### 『Self 自己探検隊がゆくⅡ』

《昨年実施されたものの第2弾。自己の内側から1歩踏み出して、自分自身が周りの環境や生活とどのように関わっているのかを色々なアプローチで考えてみる、全6回完結のプログラム。》

日程/内容・9月21日発達心理学的アプローチ

・10月5日デザイン的アプローチ

・10月19日社会学的アプローチ

・11月2日生態学的アプローチ

・11月3日宗教的アプローチ

・11月16日発明的アプローチ

定員25人

### 『CGワークショップーコンピュータ・グラフィックスを視る』

《日本におけるCG草創期の状況や国内外のCG事情、アニメーションや3D技術等CGを視る/知るセミナー。》

### 『セミナー・ワークショップーFriday Night Workshop』

《写真の歴史をゆっくり考えるワークショップで今年は「日本の写真のはじまり」を3回にわけておこなう。》

1回目「写真の渡来」1997年2月14日

2回目「技術の広まり」1997年2月21日

3回目「写真師誕生」1997年2月28日

定員30人

### 『3Dワークショップーステレオを超えて』

《視覚や聴覚を駆使しながら、3Dの過去と現在/未来について考えてみる。》

ワークショップA 1996年9月15日「視覚/聴覚の奥行き①」

ワークショップB 1996年9月22日「視覚

／聴覚の奥行き②]

#### 『ホログラフィ入門』

《講師と参加者との気軽なディスカッションを中心におこなうホログラフィ・アート入門編。2週連続。》

1996年9月16日原理と歴史 9月23日表現の変遷 定員30人

ワークショップは広報、美術館内、近隣施設、プレス、雑誌等に募集の案内をするが参加希望者が多く5～10倍の倍率があるそうで、中心は20歳代～30歳代が多い。ワークショップ参加の動機は、身近に写真のサークルが無いこと、人と人とのつながりを求めていることが考えられる。美術館での講座がきっかけとなり、その後自主的に活動を展開し、参加者同士で新しいサークルをつくり展覧会を開いた例もある。これは、生涯学習活動の望ましい展開例である。

#### ④ボランティア活動

現在のところ組織的なボランティア活動は実施していない。

### (4) 世田谷美術館

#### ①成立の概要

世田谷美術館は昭和61年(1986)3月、区民の文化的創造活動の中心施設として、地域社会の文化・教育の振興と発展に寄与することを目的に、都立砧公園の一画に開館した。昭和53年(1978)世田谷区基本構想が決議され、各種委員会の設置、条例の制定を経て昭和60年(1985)「財団法人世田谷区美術振興財団」が発足、美術館条例が制定され、同年本体工事が竣工した。基本的性格として次の5つをあげている。<sup>11)</sup>

1. 区民生活に密着した美術館
2. 教育的な役割を重視する教育美術館
3. 美術文化の交流の場としての美術館
4. 太陽と緑に包まれた都市空間の中の美術館

#### ②施設の概要

構造は鉄筋コンクリート造地上2階地下1階で、敷地面積は19000である。施設は、利用者の便を図るため企画展示関係のブロックと教育普及関係のブロック(創作室・区民ギャラリー・講堂等)の二つに分けられており、ブロック内でつながりをもっている。

主な施設は次の通りである。〔( )内の数字は面積で単位は平方メートル〕

1階:企画展示室(1025)、区民ギャラリー

[2室](320)、講堂(180)、ミュージアムショップ(45)、2階:常設展示室(783)、ライブラリー(100)、講義室(50)、地階創作室[4室](294)、喫茶室(88)

#### ③教育普及活動

開館時より「教育的な役割を重視する教育美術館」という性格を有し、力を入れてきている。初期には、ワークショップ・サマーセミナー・公開制作・ゼミナールコースという事業を実施したが、現在では姿を変えたり、新しい事業も実施されている。教育普及担当の学芸員の人員にも恵まれているようだ。

平成8年度に行われた代表的な事業を見よう。タノシサ・ハッケン・クラス

『ミュージアムオリエンテーリングー子供組一』

第1回[1996年5月12日(日)]から第6回[1997年3月16日(日)]まで実施。

対象:小学生・中学生 定員:無し

参加費:無料

『ゲンキニ・エンゲキ'96』

1996年7月31日(水)から8月10日(土)まで実施。

対象:小学生 定員:25名

参加費:無料

『建築意匠學入門 其之五《遊興の建築》』

1996年6月15日(レクチャー)から7月6日(フィールドワーク)まで毎週土曜日、4回通して実施。

対象:高校生以上の成人 定員:30名

参加費:2000円

『ミュージアムオリエンテーリングー大人組一』

第1回[1996年6月9日(日)]、第2回[1997年2月23日(日)]実施。

対象:高校生以上の成人 定員:無し

参加費:無し

『TOKYOパノラマウオーク《写真家と歩く東京》』

1996年9月28日から10月19日まで毎週土曜日4回通して実施。

対象:高校生以上の成人 定員:30名

参加費:2000円

『バックトウーネイチャー'96《山紫水明》』

1996年11月2日(土)から5日(火)まで3泊4日、日光湯元温泉周辺で実施。

対象：高校生以上の成人 定員：25名

参加費：2000円

美術大学

昭和62年度から実施している。美術館の機能をフル活用し、半年にわたって講義・鑑賞・実技といった様々な各度から美術をとらえていく、区民を中心とした総合的な美術講座。美術という視点から日常生活を見つめ直すことを目指す。

次のような内容である。(平成8年度入学案内による)

定員：60名

受講料：3万円

履修期間：平成8年5月～12月

受講日：週2回 火/木(原則として)

講義/鑑賞会/実技[平面構成][デッサン]  
[版画][立体]

修了作品展

美術鑑賞教室

区内の小学生(4年生)全員を対象に、企画展、常設展についての簡単な解説と美術品を理解するための一般的なガイドをするものである。一日2校、総計64校の鑑賞教室が実施される。事前に小学校に出向いてのオリエンテーションを行っているケースもある。また大学からの博物館実習の受け入れをしているが、東京学芸大学学生数名が学芸員のアシスタントとして、年間を通してこの教育活動に参加する試みも行われている。<sup>12)</sup>このような形で、美術館と大学と小学校教育とが連携していく活動は今後の美術館教育の方向を示すものとなるだろう。

子ども向けのミュージアム・ガイドも2種類作成してある。

プロムナード・コンサート

月に一回の割合で実施されている。

友の会主催による各種講座

昭和62年4月に世田谷美術館友の会が発足し、展覧会の鑑賞会、実技講座、友の会だよりの発行等の活動が行われている。

④ボランティア活動

現在のところ、ギャラリートーク等を行う組織的なボランティア活動は実施していない。友の会による、大型展の場合の会場案内、図録販売等が行われている。

しかし、平成9年度には「建築意匠学入門」講座の修了生有志により、自主的な活動で美術館の講座を実施する予定である。これは、かつ

て美術館の講座で学んだ人達が美術館外で自分たちの組織をつくり活動を行っており、その組織との連携により美術館活動が広がって行くことを示している。美術館と市民との新しい関係や方向ができてつつあることを示している。

(5) 目黒区美術館

①成立の概要

目黒区美術館は昭和62年(1987)11月、目黒区民センターの一角に開館した。昭和53年(1978)文化施設建設検討連絡会が発足し、昭和59年(1984)基本構想、基本設計が策定され、昭和62年(1987)「財団法人目黒区芸術文化振興財団」が設立され同年竣工した。地域に息づく身近な美術館、気軽に美術に親しめる憩いの場、美術を媒介とした都市生活者の自己発見の場として機能している。

②施設の概要

地上3階地下1階の4層からなり、本館と有料の貸し出しスペース区民ギャラリーから成り立っている。2階の展示室と1階にあるワークショップスペースを階段で直接つないで、ダイナミックな活動が展開されている。主な施設は次の通りである。〔( )内の数字は面積で単位は平方メートル〕

展示室A(319)、展示室B(170)、展示室C(66)展示ロビー(45)、ワークショップスペース(148)、区民ギャラリー(380)

③教育普及活動

開館時より展覧会と一体となった講演会、音楽会、公開制作、ワークショップ、美術講座等の多彩な教育普及活動を展開している。特にワークショップについて館の案内<sup>13)</sup>に次のように記されている。

ひとつひとつ、ひとつもの、ひとつこととの関係性にこだわりながら、美術を通じた新しいコミュニケーション活動として、さまざまな年齢層を対象にしたプログラムを、春と夏に開催しています。特に、作品展示と密接に関連づけた夏の企画では、毎回身近なテーマを取り上げ、五感に訴えかけるダイナミックな表現活動の機会を、開館以来多くの方々に提供してきました。そのほか、オリジナル教材として『画材と素材の引き出し博物館』<sup>14)</sup>を制作、さまざまな企画の中で役立てています。

平成7年度の主な教育普及活動を見よう。

## A ワークショップ活動

- a. ワークショップ・手と目の冒険広場  
積むかたち+組むかたちⅡ
- b. からだのワークショップ からだと話そう！

## B 美術講座

- a. Part 1 染色による色と技法の秘密をめぐると話そう
- b. Part 2 里見勝蔵展会場で美術評論家等を講師に講座を開催

## C ギャラリーツアー

- 展覧会開催中に第3中学校などの生徒・教諭を対象に実施
- 手と目の冒険広場 積むかたち+組むかたち
- からだのワークショップ からだと話そう！

平成8年度は、展覧会「手と目の冒険広場心を癒す植物アート・ボタニカル・ガーデン」に関連して次のワークショップが行われた。

### ○花・草・木の植物詩絵集

8月4日/10日/17日 中学生以上大人20名

### ○壁に描くぞ！植物に潜むビックリ・ドッキリ

8月13日/21日/22日 小学生・中学生20名

### ○植物楽譜をつくるー小さな生命を感じて

8月14日/15日/18日 小学3年生以上大人20名

### ○街の中の植物たち・関係図・発見！

8月24日/25日 小学3年生以上大人20名

### ○こころの造形“植物と私”ー日の出町・植物との対話

8月31日/9月1日/7日/8日 小学4年生以上大人20名

### ○飛ぶタネのスカイダイビング“プロペラ・パラシュート・翼”

8月29日 小学3年生以上大人30名

### ○どんぐり帝国の晩餐会

9月14日/15日 小学生・中学生20名

## ④ ボランティア活動

美術館活動を地域から支えるものとして、開館1ヶ月前（1987年10月）にボランティアが募集された。開館の際、記念式典の招待状やポス

ターの発送、記念式典当日の会場整理、展覧会の監視業務（1987年のみ）等を行った。平成元年（1989）美術館内のラウンジが開業して以来日々の運営を担当している。平成7年（1995）の会員数は70名（内男性1名）である。昨年の主な活動状況を見よう。

1. ラウンジ [展覧会会期中の午後、毎日2～3人で来館者にコーヒー・紅茶等の提供（有料）をする。月に1～2回程度の当番となる。]
2. ポスター等の発送 [展覧会ごとに作成されるポスター等を関係施設等に送る作業。]
3. ワークショップ・アシスタント [夏の展覧会会期中のアシスタント。]
4. チラシ等の整理 [美術館に送られてくるチラシやニュースレターの整理。]
5. ボランティア事務 [ラウンジ当番表の作成等。]
6. トイ・コレクション [トイ・コレクションの整理と貸し出し。]

今年度（平成8年度）からボランティア会として体制を整えた。それはボランティアを“なんとなく”続けているというアンケートの結果等を踏まえ、ボランティア会の設置目的を「生涯学習の場」として、幹事会のもとに次の3部分に分かれて各種活動に積極的に取り組んで行くように変更した。

1. ラウンジ営業部 [事務局、火曜日班、水曜日班、木曜日班、金曜日班、土曜日班、日曜日班]
  2. 広報部 [広報班]
  3. 学芸部 [資料整理班、作品カード整理班、ワークショップ班、トイ・コレクション班]
- なお、今後のボランティア会の入会は加入希望者が increasing しているため目黒区在住・在勤者となった。

## (6) 横浜美術館

### ① 成立の概要

横浜美術館は平成元年（1989）11月横浜“みなとみらい21”地区に開館した美術館である。昭和56年（1981）横浜市文化問題懇談会が市民の文化的創造活動の拠点としての美術館建設を提言した。同年美術館基本構想委員会が発足し美術館の理念、収集方針、機能、施設、運営等の基本的な性格について検討を始めた。昭和62年には財団法人横浜市美術振興財団が設立され事業が開始され、昭和63年（1988）建物が竣工

した。

その理念は次のように記されている。<sup>15)</sup>

横浜美術館は、市民の美術に対する多様なニーズにこたえる場として広く近代現代美術の鑑賞と市民の創造活動に寄与し、豊かな市民文化形成に役立つことを目標に、特色ある美術館を目指しています。

1. 国際文化都市横浜にふさわしい、世界に開かれた美術交流の場にします。
2. 近代・現代美術が快適な環境で鑑賞できると同時に、市民や子どもたちに、創造活動の場を提供します。
3. 美術資料の収集、調査、保存、研究を行い、美術の普及振興を図り、さらに、美術情報センターとしての機能充実をすすめます。
4. 横浜が写真発祥の地であることから、特に写真の収集に力を注ぎます。
5. 美術とほかの芸術分野との関連を考慮しながら市民の美術活動を推進し、発展させる場とします。

## ②施設の概要

鉄骨鉄筋コンクリート造、敷地面積19803、延床面積26829の中に次の施設がある。

1. 展示室は7つあり1つは写真の常設展示場となっている。
2. 美術情報センター ○美術図書館○美術情報ギャラリー○フィルム&ビデオ・アーカイヴ
3. 子どものアトリエ
4. 市民のアトリエ
5. レクチャーホール
6. ミュージアム・ショップ

## ③教育普及事業

横浜美術館では開館に先立ち、生涯学習にかかわるものとしてアトリエ講座の開催や、美術映画の上映、美術図書室などの美術情報事業の充実等が企画され、実施されてきた。それらを概観してみよう。

### 1. 市民のアトリエ

市民のアトリエでは、次のような理念や方法で教育に関与している。「美術館は、旧来の行政の中での社会教育という固定したものの見方からとらえるのではなく、市民の文化的形成としての生涯教育のなかでとらえなければならない。市民の総合的文化活動を育成する立場から、

市民の要求に対する受け身の姿勢ばかりではなく、創造活動及び研究の場を提供するなど市民へ能動的に働きかける姿勢が大切である。」ここの美術教育は、年齢、性別、美術に対する認識の異なる不特定多数の人を対象に、美術館に属する教育機関としての事業を「創作」という立場から美術館における教育・普及の一端を担っていく。この創作体験を通して「美術とは何か」を自己の中で成長させ得ると考え、「何かをわからせよう」とすることより「造形」「創造」というものを市民が「感じることができる場」あるいは「出会いの場」となることを目指している。<sup>16)</sup>

活動は、市民のアトリエの平面室、版画室、立体室またはアートギャラリーを有効に活用し各種講座を通して行われている。平成8年前期の募集要項をもとに簡単に講座内容を見よう。

(「」内は講座名)

1. 長期講座(年12回・定員15~20名)「喜びを創る 障害者(児)や高齢者と共に感じる」他
2. 短期講座(年6~7回・定員20名)「油絵の修復・油絵の材料」他
3. 夏期集中中学生講座(年5回/8月・定員20名)「銅版画」
4. 造形研究会(年12回・定員15名)
5. 表現研究会(年12回・定員15名)
6. 版画研究会(自主制作予約制・定員17名)
7. 土曜版画室(予約制・定員17名)講座修了生作品展
8. 制作公開相談会(年2回・定員10名程度)「自分を生かす」

それぞれの活動は盛んで申し込みの希望者が多く抽選で決定している。応募者によってはなかなか当選出来ない人もおり、講座受け入れの方法も検討されなければならない。参加者の多くは横浜市在住で、平面関係は比較的年輩者、版画関係は女性や若年者、立体関係は年令を問わず人気がある。

### 2. 子どものアトリエ

子どものアトリエは次のような考えかたの下に運営されている。「『美術館は大人が利用するもの』という常識を越え、子どもたちが美術に接し、体験的に学べる施設を提供し、子どもたちが自分の力で、豊かに素直に成長していく手助けを行うことを目的として設置される。」「学

校ではでき得ない、また画一化されない形で  
体験を通して、生活全般に係わる関心を引き出  
すような活動が望ましい。」また美術館と学校と  
が子どもたちの豊かな未来と可能性を対し、美  
術をどのように生かすべきかを共同研究する必  
要性を示唆している。<sup>17)</sup>

利用対象については、4歳から12歳までの幼  
児および児童を原則としているが、4歳以下あ  
るいは中学校、養護学校までその利用が広が  
っており、具体的な活動は以下のようにしてい  
る。

1. 学校のためのプログラム…小学校・幼稚園・  
保育園などと連携して造形活動を行うプロ  
グラム。

事前申し込みでクラスや学年といった団  
体が専用で利用することができる。

2. 個人の造形プログラム…個人を対象とした  
有料の造形講座で内容等は「ピコラ」で広  
報され申し込みを受ける。

3. 展覧会・各種イベント…子どものアトリエ  
独自で企画する展覧会や各種イベント。

また、子どもを対象とした情報誌「横浜美術  
館子どものアトリエニュース『ピコラマガジ  
ン』」を発行している。アトリエの活動の紹介  
や、収蔵品の紹介、美術に関する言葉や道具な  
どを分かりやすく紹介し、美術や美術館に対  
する興味を促すことを目的としている。

3. 美術情報センター

美術情報センターは特色のある美術館をめ  
ざす試みの一つとして、美術に関連したさ  
ざまな情報を収集・蓄積し、市民に提供す  
ることを目的とし、次のような機能を持  
っている。

1. 市民の自主的・創造的活動を支援するた  
め、横浜美術館の収蔵する美術作品・図  
書資料・その他関連資料並びに全国の主要な  
美術館・博物館・画廊などの情報を、広く  
市民に提供する。
2. 横浜美術館が展覧会活動、創作活動、教  
育普及活動を推進する中で、情報面から美  
術館業務を支援する。

具体的には次の方法によって市民・研究者に  
提供されている。

1. 図書資料 [美術図書室] …国内・外の美  
術図書、雑誌、展覧会カタログ・紀要など  
を体系的に収集し、美術図書室において関

覧利用できる。利用者は学生が中心である  
が小学生から高齢者まで幅広く見られ、放  
送大学のスクーリングでのレポートの資料  
としての利用も多いという。

また、日本の美術教育に関する資料を中  
心にコレクションされた「中村文庫」も特  
筆される。

2. コンピュータ [美術情報システム] …館  
内 (美術図書室・美術情報ギャラリー) に  
設置された、検索用端末機により美術情  
報を検索することおよびこれをプリントア  
ウトすることができる。

3. 映像メディア [美術情報ギャラリー] …  
名画映像レファレンス・ビデオライブラ  
リーの二つのシステムにより、美術情報提  
供を行っている。

4. フィルム&ビデオ・アーカイヴ…実験映  
画作品、ビデオ・アート作品などを収集し、  
映画会などで公開する。<sup>18)</sup>

#### ④ ボランティア活動

現在ボランティアの活動については検討中  
であり、募集はしていない。職員は不足気味だが  
インストラクターや学生アルバイトをお願いし  
ている。

#### (7) 山梨県立美術館

##### ① 成立の概要

山梨県立美術館は、置県100年記念事業として、  
昭和53年(1978)11月3日に甲府市に開館した。  
昭和47年(1972)置県100年記念事業として総  
合博物館の建設が決定され翌年構想が変更され  
美術館建設が決定された。昭和53年山梨県立美  
術館設置及び管理条例が制定施行され、建築本  
体の工事が完了した。その設置目的は、美術に  
関する県民の知識及び教養の向上を図り、県民  
文化の発展に寄与するためである。条例による  
と事業は次のようになっている。

1. 美術品及び美術に関する模写、模型、文献、  
写真、フィルム等(以下「美術品等」という)  
を収集し、保管し、及び展示すること。
2. 美術に関する専門的、技術的な調査研究を  
行うこと。
3. 美術に関する講演会、講習会、映写会、研  
究会等を開催すること。
4. 美術品等の利用に関し、必要な助言、指導  
等を行うこと。
5. 一般展示室、実習室等を一般の使用に供す

ること。

6. 前各号に掲げるもののほか、美術品の設置の目的を達成するため必要な事業。

## ②施設の概要

芸術の森公園の一画に位置し、地上二階の施設で、一階が教育・普及・サービススペース、二階が常設展示室、企画展示室となっている。

主な施設は次の通りである。〔( )内の数字は面積で単位は平方メートル〕

常設展示室A(429)、常設展示室B(372)、企画展示室C 1(359)、企画展示室C 2(212)、企画展示室C 3(406)、一般展示室1(288)、一般展示室2(209)、講堂(222)、実習室(148)

## ③教育普及活動

教育普及に関しては開館時に次のような活動が行われていたが、現在では姿を変えたり新しいものも実施されている。それらを概観してみよう。

1. 講演会…特別展覧会に関連する事柄の講演会で主に土曜、日曜の午後に実施された。
2. 一般展示室使用…芸術活動普及部門の施設として、県民に開放され、各種展覧会に活用されている。
3. 実技講座…一般社会人を対象とした実技講座で素描、銅版画、日本画、洋画、石版画等が行われた。
4. 広報…現況の理解や鑑賞、教育の資料として活用してもらうために、美術館案内、図録、広報等を発行し、関係機関に提供している。
5. オリエンテーション…団体等の来館者に対して、希望により、美術館の概要や主要展の作品解説等を実施している。
6. サマーコンサート…“美術と音楽を結ぶ夕べ”というテーマで、美術館庭園で開催。  
→美術館サマーコンサートへ移行
7. ニューイヤーコンサート(昭和57年度からスタート)…年の初めに行う。  
→ギャラリーコンサートへ移行
8. 美術館映画会…美術館講堂で上映された。
9. ビデオライブラリー…一階二階のロビーで放映された。  
→ハイビジョン・ギャラリーへ移行
10. 夏の美術講座(昭和58年度からスタート)…高校・大学の年令層を対象としてはじまった美術講座。一般の人にも受講可能となった。

11. 作文コンクール

12. 子供のためのワーク・ショップ…第二土曜日を中心に実施された。

13. 手で見るミレー

14. ワーク・シート作成

15. 教師のための鑑賞研究会

16. 移動アート・ボックス…美術教育を基盤にした移動型教材の貸し出しシステム。

17. 郷土作家シリーズ<sup>19)</sup>

なお平成8年度ワークショップ美術体験講座は「プロから学べ!心と技」というテーマで次のように実技講座が実施された。

1. 木版画(5月) 2. 銅版画(5月~6月)
3. 版画(6月~7月) 4. 石版画(8月~9月)
5. 版画(9月) 6. 絵画(9月~10月)
7. 日本画(10月~11月) 8. 洋画1(11月~12月)
9. 洋画2(平成9年2月)
10. 絵画(平成9年2月~3月)

## ④ボランティア活動

山梨県立美術館では、美術館の運営に“協力員”という形でボランティアの協力を得ている。目的は、その活動を通してよりきめ細かく魅力的なサービスを行い開かれた美術館を目指すことにある。昭和53年(1978)の開館時からボランティアの募集を行い、2年に1度ずつの募集を続け現在に至っている。平成7年度・8年度の募集要項をもとに、募集の概略を見たい。

### a 条件

(a) 美術についての関心と理解を持ち、または専門的知識を有している方で、月1回以上の活動が可能な方。加えて年5日程度の協力をお願いしたい。

(b) 館が行う研修に出席できる方。

(c) 満20歳以上65歳までの県内在住者(ただし再応募の場合概ね70歳まで)

### b 募集人員[約120名]

c 事前研修[3日程度の研修を行う]

d 教養研修[委嘱後年間3回の研修を行う]

e 委嘱および委嘱期間[事前研修の修了者/平成7年4月1日~平成9年3月31日まで]  
内容は次の5つの部門に所属(2部門まで重複可)し月1~2回の活動をするのである。

1. インフォメーション部門…受付案内・誘導・整理(月1回/終日)
2. 解説等部門…常設展の案内と解説(月1回/終日)



3. 図書等資料整理部門…美術関係書籍・資料の収集・整理・分類等（月 1～2回／金・土曜の半日）
4. 視聴覚教育補助部門…企画展・他美術館等の紹介・宣伝・ビデオ・スライドの制作・整理放映（月 1～2回／不定期・随時）
5. 実技講座等補助部門…館主催の実技講座への参加・手伝い等（年間開催講座期間分担当／平均年15～20日）

平成7年度末の活動者数は159名（男性23名・女性136名）で年齢別では20歳代から70歳代まで幅広く特に50歳代の女性の方が多いようである。

また「山梨県立美術館協会の会報」が会員の編集で1年に1回の割合で発行されている。第17号（平成8年3月発行）は24ページにわたるもので、活動報告を中心にまとめている。山梨県立美術館におけるボランティア活動の現状について「会報17号『ボランティア活動について—協力員アンケート結果報告』」に基づいて抜粋したものを見てみよう。（〔数字〕は人）

○ボランティア歴

1年未満[30] 5年未満[17] 10年未満[29]  
10年以上[25] 17年[5]

○職業

無職[37] 主婦[39] 会社員[10] 自由業  
[4] アルバイト[3] エンジニア他[10]

○交通機関

車[68] 徒歩[8] 電車・バス[7] 自転車  
[17] バイク[3]

○美術ボランティアに応募した動機

美術について興味と関心があった[81] ボランティア活動の興味と関心を持った[49] 公募広告やマスメディアの募集で知った[23]  
生活の中で時間的余裕ができた[22]

○美術館ボランティア活動に従事して良かった点

自分の勉強になる[58] 接客して喜んで頂いた時[54] 友人ができた[46] 感性・心が豊かになった[28]

これらを見ると、山梨県立美術館のボランティア活動を支えているのは、長くボランティア経験を積んだ、比較的余裕のある女性の姿が見えてくる。美術を契機に学習活動に取り組み始め、それぞれがなんらかの形で学習効果を得ているように思われた。

## 2. 美術館での教育

### (1) 美術館教育の意味

前節で各美術館の成立、施設、教育普及、ボランティア活動等を概観したが、それらをもとに美術館における教育の意味を考えてみよう。取り上げた美術館は比較的新しくつくられたため、当初から教育普及を推進する事業が考えられていた。それぞれの館で理念や方法に共通する面や異なる部分が見られたが、いずれも現在のところ実践を積み重ね新しい形を模索中のようだ。この“模索中”という姿は、現代において社会的役割を担う美術館の存在そのものを問うことに重なっていると思う。

本稿では美術館での教育活動や普及活動全般の内容を合わせて「美術館教育」と呼びたい。美術館の作品や作家、学芸員等の人材や情報、施設・設備等を通して行われる広い意味での“美術教育”であると考えられる。

“美術（芸術）教育”は人間が長い歴史の中で、つくりあげ蓄積してきた芸術文化の継承や創造のため無くてはならないものである。また今日教育改革が叫ばれている中、今後必要とされる自己教育力や多様な価値観を育てるためには想像力が大切であり、総合的な人間を育てるために美術教育は不可欠なものである。

学校教育（小・中・高）においては発達段階に応じた学習法が研究され、すぐれた教材も多く実践されている。その成果として創造力、表現力、感性、意欲、生きがいなどを育てており、その果たしてきた意義は大きい。新しい教育が模索されている中、全国の学校における美術教育は今後ますます重要性を増して行く。

それに対して美術館教育の場合、これからも学習方法が開拓される分野であり、実物の作品や作家からの直接の影響を受けたり、専門の施設や設備を使用することができるという特長がある。対象者として子どもから高齢者まで世代の幅があり、障害を持った人や、外国人等広く考えられる。活動の内容は個人に対する学習の支援である。

取材した美術館ですでに実践されていた所もあるが、これから学校と美術館とが連携して相互に補完しあって美術教育を行ってゆくケースが多くできてくると思う。地域的に限られてしまうという問題もあろうが双方がその特長を生かして実施されるべきである。

また、成人対象の場合、市民自身の学習課題によって主体的に学習活動に参加し、教育がされて、美術館がそれをサポートするような活動のシステムが望まれる。このような活動により“人が育ち”情報を発信したり地域文化の拠点となる美術館ができるのである。

## (2) 美術館教育の方法と分類

我が国の美術館教育が、さまざまな形で行われているようすを見てきたが、そこには一般的に耳慣れない横文字のことも見受けられた。もともと欧米の美術館活動からの引用であり、今までに無かった内容も含んでおり、翻訳の難しい場合も多い。以下に活動の事例を紹介しながら美術館教育の方法をまとめてみよう。美術館教育の活動内容は“教育活動”と“普及活動”の2つに大きく分けることができるが、はじめに教育を主にした活動、次に普及的な活動について見るとともに、取材した美術館の中から具体的な活動も取り上げてみよう。

### A セルフガイド・ワークシート

展示作品や作家について文章や図版で説明している印刷物である。最近では成人以外に子ども向けのものもつくられるようになった。鑑賞情報の提供であり、作品に接する手引きとなるが作成にあたっては“ことば”を使うことによって、作品の持つ豊かなイメージを一つの方向に限定してしまわないように留意する必要がある。これに近いものとして、部屋ごとの展示解説のルームガイドなどがある。展覧会のおりに発行される書籍形式の図録は調査・研究の成果をまとめてあり、鑑賞や研究のための貴重な印刷物である。

○東京都現代美術館の常設展示場のセルフガイドをまとめて1冊の書籍形式にしたものをはじめとして、すべての美術館で作成されていた。

### B ギャラリートーク・ツアーガイド

実際の展示空間において美術館員が鑑賞者のために作品解説などをすること。美術館員とは担当学芸員の場合やボランティア(美術館採用・学生)の場合等様々であり、美術館と来館者とを結ぶ役割をはたす。作品のとらえ方や鑑賞者への対応、解説の技術などの技量が必要となる。定期的に行うものや、鑑賞者の希望によって行うものなどさまざまである。

○水戸芸術館、東京都現代美術館、山梨県立美術館ではボランティアによって実施されている。

### C 美術映像情報

講堂での美術映画の上映会から、最近の専門施設での視聴覚機器を使った個人向け映像情報提供の活動までいろいろ見られる。近年の電子機器の開発やソフトの充実によって今後さまざまな方法が考えられる。

○東京都現代美術館 [ハイビジョンシアター／ビデオブース]

○横浜美術館 [美術情報ギャラリー／フィルム&ビデオ・アーカイヴ]

### D 講演会・研究会

企画展示に合わせて、または独自に作家や評論家・学芸員等が聴衆を前にテーマに沿って話を展開するという形式のものが多い。比較的多くの聴衆を対象とすることができる。

○すべての美術館でおこなわれている。

### E ワークショップ

本来の意味は1(工作仕事をする)仕事場、作業場 2ゼミ、研修会、実習室 3(文学・芸術作品の)創作の場、[方法]<sup>20)</sup>とある。初期には成人対象の「実技講座」や「実技教室」という名称で実技教育の傾向が見受けられたが、最近では“美術”の概念を広とらえるようになり、美術館の施設・設備を利用したものから館外活動にまで及び、内容も作家や学芸員と環境や参加者との交流活動へと多岐にわたる。またその意味を「ワークショップは、多国籍、多世代の人々が、同時多発、多重交流を通じて、身体で考える集団創造の方法です。」<sup>21)</sup>ととらえることもできる。これからの美術館教育活動の主流のひとつとなってゆくと思われる。

○すべての美術館でおこなわれている。

### F 音楽・舞踏

ミュージアム・コンサート等の芸術分野との共同作業で行われるイベントによって、美術以外に関心をもつより多くの人々に対して美術館を開かれた場とすることができる。

○すべての美術館でおこなわれている

### G 案内パンフレット・ガイドブック

出版広報活動が主となる普及活動として、案内パンフレットやガイドブックの作成や配布がある。来館者や関係機関など不特定多数の目に触れるものであり、美術館を代表する印刷物となるもので展覧会の内容等のわかりやすく正確な情報をのせることが大切である。

○すべての美術館でつくられている。

## H 美術館ニュース

定期的に美術館が発行する印刷物。展覧会や行事の予告、収蔵品の解説等美術館の特色を明確に出すことができる。“友の会”やボランティア等が編集出版しているところもある。

### I 美術図書室

研究者や一般の利用者向けに美術関係の図書が閲覧できる図書室が設けられている。

- 東京都現代美術館 [美術図書室]
- 東京都写真美術館 [図書閲覧室]
- 世田谷美術館 [アート・ライブラリー]
- 横浜美術館 [美術図書室]

### J マルチメディアによる情報発信

最近、マルチメディアによる情報の発信が行われるようになった。美術館のホームページ開設で、インターネットによる利用者への施設案内、展覧会案内、等の情報提供を行っている。また双方向コミュニケーション・スペースとして開放して行く動きも見られる。今後大きく変化して行く分野であり、可能性が残されている。

## III 生涯学習社会と美術館の役割

これまで、我が国が生涯学習社会をめざす意味や、個々の美術館の活動状況を見て来た。この章では、美術館に求められている役割や問題点、課題について考え将来の美術館像を展望してみたい。

### 1. 美術館に求められている役割と課題

#### (1) 開かれた美術館へ

現在、美術館や博物館はどのような課題を抱え、どうあるべきなのだろうか。はじめに、利用者の立場から探してみたい。資料としてライフデザイン研究所『ミュージアムとのこちよい関係づくり』のアンケート結果等をもとにした。<sup>22)</sup>

美術館・博物館に行く理由・目的 [3つまで複数回答] ( ) 内パーセント

#### モニター調査

- ①お目当ての芸術作品などの展示物がある (54.4)
- ②美的、知的な感動を得る (49.1)
- ③知識や教養を高める (39.4)
- ④建物や雰囲気が好き (25.6)
- ⑤話題になっている (18.6)

#### 来館者調査

- ①建物や雰囲気が好き (48.5)
- ②美的、知的な感動を得る (46.1)

③疲れた心をいやす [ストレス解消] (27.7)

④お目当ての展示物がある (27.2)

⑤知識や教養を高める (26.2)

これらを見ると、本来の目的の「展示品の鑑賞」が多くを占めているが、安らぎの場としての魅力で足を運ぶという状況も見られ、他に「人生を有意義にする」「ひまつぶし」「家族や友人との交流を楽しむ」「余暇の過ごし方として安くすむ」等、多様化していることがわかる。これからは、このような多様なニーズに応えるため、魅力的な企画・展示の充実はもちろんであるがその他の面での対応も求められることになる。

美術館・博物館に対する不満な点 [複数回答] ( ) 内パーセント

#### モニター調査

- ①美術館・博物館についての内容を知るための情報が少ない (52.1)
- ②入場料金が低い (46.8)
- ③自宅や勤務地の近所がない (42.4)
- ④閉館時間が早すぎる (40.8)
- ⑤都心に集中している (32.1)

#### 来館者調査

- ①入場料金が低い (38.3)
- ②閉館時間が早すぎる (38.3)
- ③内容を知るための情報が少ない (29.6)
- ④自宅や勤務地の近所がない (16.0)
- ⑤展示物が少ない (10.7)

美術館・博物館に期待すること [3つまで複数回答] ( ) 内パーセント

#### モニター調査

- ①入場料金を安くする (45.0)
- ②夜間でも利用できるようにする (41.3)
- ③複合文化施設にする (35.1)
- ④広告宣伝など情報を増やす (30.3)
- ⑤講座やイベントを増やす (28.2)

#### 来館者調査

- ①夜間でも利用できるようにする (42.2)
- ②入場料金を安くする (36.4)
- ③博物館間のネットワークの充実 (31.6)
- ④複合文化施設にする (19.4)
- ⑤コレクションを増やす (18.9)

不満と期待は表裏一体の関係にあると見てよいだろう。ひとつひとつが現実的な課題であり、入場料金の問題では、低料金維持に努

めるべきであるが、必要経費の高騰など難しい面もあり財政的支援も求めたい。開館時間の夜間延長については、生活の夜型化傾向の中、必要なサービスのひとつであろうが、職員の過重労働などにつながらない解決策が望まれる。広告宣伝活動や普及活動にも力を入れるべきであるが、一方利用者側が主体的に情報を探す努力も必要であろう。

その他、施設やネットワーク等、行政や財政的な面から見ても難しい問題を抱えているがこれらを改善してゆかねばならない。

#### 美術館・博物館が抱える問題点 [複数回答]

##### ( ) 内パーセント

##### 施設調査

- ①スタッフの数が足りない (53.4)
- ②スペースが足りない (44.3)
- ③予算が足りない (38.6)
- ④交通の便がよくない (23.9)
- ⑤利用者が少ない (18.2)

運営上の問題点を見ると、現場での人員・予算や施設の不足が叫ばれている様子がわかる。調査時に増して景気の低迷する中、活動予算の削減が強いられているようである。資金やスタッフの確保は美術館活動の要となるものである。人材の養成や、芸術活動に対して経済的な支援をする社会的な高まりが是非とも必要である。

次に、近代の美術館や博物館に対してそれらの制度を批評する視点から、多くのことが指摘されており、それらを見よう。「造形作品を本来あるべき固有の場所から不自然な形で切り離し、異質なものが別の空間に集散的に展示されるだけのものとなる」「美術館に収められた造形作品は“芸術作品”としてガラスケースに収められ手を触れられぬ所に隔離されてしまう」「美術館を日常との関係を断ち權威化・聖域化した場所としている」「どんな芸術作品もそれが生きて行くためのふさわしい場所があるはずだが、美術館の中に押し込められるとその機能が剥奪されてしまう」等である。<sup>23)</sup>

美術館や博物館は、現代の社会的な役割を果たすため、これらの批判に応えなければならないだろう。そのひとつとして「開かれた美術館」という考え方がある。何をだれにどのように開放するのかは多く論議のあるところであるが、

「作品や情報の持っている価値を核として、人材、施設・設備も含め人々に開放すること」と考えられるだろう。

具体的には、展示方法にしても、鑑賞者が作品に触れたり五感を使って鑑賞したり、参加体験ができること等があげられ、これらについてもいくつかの試みがはじまっている。前章で述べた美術館教育の充実も開かれた美術館への試みである。<sup>24)</sup> このような「開かれた美術館」活動は地域と美術館との結びつきを強くし、今後の美術館活動の方向を示すものとなる。

一方、美術館や博物館という制度を西欧から移入し、施設としての設備は取り入れたがその背景にあった思想を取り入れることは無かった。だから日本の美術館は西欧に比較して遅れているという批判も聞かれる。美術館が日本各地に建設され各種活動が行われている中、単に西欧に追従するのでは無い、国際的に通じる日本の美術館のありかたを考えていくことも必要である。

#### (2) 美術館でのボランティア活動

ここでは平成4年の生涯学習審議会答申をもとにボランティア活動を考え、それらを踏まえて美術館でのボランティア活動と生涯学習社会との意味を考えてみたい。

上記の答申においてボランティア活動の支援・推進については次のように述べられている。生涯学習とボランティア活動

生涯学習は、人々が、自発的意志に基づいて生涯にわたって行うことを基本とするもので、意図的・組織的な学習活動として行われるだけでなく、人々の様々な活動の中でも行われるものであり幅広い範囲にわたっている。

ボランティア活動は、個人の自由意志に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献することであり、ボランティア活動の基本理念は、自発（自由意志）性、無償（無給）性、公共（公益）性、先駆（開発、発展）性にあるとする考え方が一般的である。

このような生涯学習とボランティア活動との関連は次の三つの視点からとらえることができる。第一は、ボランティア活動そのものが自己開発、自己実現につながる生涯学習となるという視点、第二は、ボランティア活動を行うために必要な知識・技術を習得するための学習として生涯学習があり、学習の成果

を生かし、深める実践としてボランティア活動があるという視点、第三は、人々の生涯学習を支援するボランティア活動によって、生涯学習の振興が一層図られるという視点である。これら三つの視点は、実際の諸活動の上で相互に関連するものである。

ボランティア活動は、このように、生涯学習との密接な関連を有するとともに、その活動は現代社会における諸課題を背景として行われるものであることから、豊かで活力ある社会を築き、生涯学習社会の形成を進める上で重要な役割を持つ。

前章で見てきた美術館ボランティア活動を中心に上記の三つの視点からまとめてみよう。

第一の、ボランティア活動そのものが自己開発、自己実現につながる生涯学習となるという意味では、活動が行われている全ての美術館のボランティアにあてはまるだろう。取材した美術館以外にも北九州市立美術館のボランティアの活動は昭和49年（1974）の開館時から20年以上続きその様子は『北九州市立美術館美術ボランティア20年誌』に詳しい。<sup>25)</sup> また宇都宮美術館開館記念プレ・ワークショップで、地元の大学生がボランティアとして協力参加したが、これも自己開発につながるものであろう。<sup>26)</sup>

第二のボランティア活動のための知識・技術習得のための学習を生涯学習とする視点でも、ギャラリートークを実施する美術館では特に重点的に行われている。水戸芸術館の「特別研修講座」、東京都現代美術館の「養成講座／一般向け美術講座」などが代表的である。

第三の視点では、各種のボランティア活動が美術館を訪れる観衆に対する教育（美術館教育）を結果的に支援する立場になっているのである。これは、生涯学習を一層振興することにつながるのである。

美術館におけるボランティア活動は、初期には館側の人手不足による人員補充の意味で館主導で募集が始められたケースが多い。それが自発性を持った学習者の志向とかみ合って、双方からの取り組みで活動が成り立っている。現在ではボランティアが館にとって必要な存在となってきた。将来美術館と市民とが対等な関係となり、市民の活動が美術館活動の主要な位置を占めるようになり、市民参加の美術館活動が展開されるであろう。ボランティアは生涯

学習社会を目指す上で、大変重要で有効な活動方法であると言える。

一方、近年“友の会”やボランティアの組織化がすすむ傾向が見られ、（表1）地域住民が美術館に関わることで、「開かれた美術館」により近づこうとしていることを示している。

## 2. これからの美術館

### (1) 美術館の未来

現在、我が国の館園数は3000館（日本博物館協会：以下略「日博協」）（表2）とも6000館（丹青研究所：以下略「丹青」）<sup>27)</sup>とも言われているが、その内訳と最近の建設の状況を以下に概観してみる。

日博協の調査によると、平成7年3月現在総館数は3225館あり、うち歴史博物館が最も多く1427館（44%）、次いで美術館が645館（20%）である。以下、郷土博物館462館（14%）、理工博物館156館（5%）と続いている。昭和55年からの建設状況を見ると、毎年100館近くが新設され過去5年間に限ってみると、平成4年度をピークとして増加率の若干の減少傾向が見られる。

一方、丹青の調査によると過去5年間に毎年約300館の開設があり、1993年度をピークとて減少している様子が見られる。（表3）

これは、ここ15年間全国各地に多くの博物館や美術館が開設されてきたが、現在はその勢いが弱まりつつあることを示している。各地に都道府県レベルでの施設の建設が一巡し、市区町村レベルの建設の段階に入っており、バブル経済の後の不況も伴っているためと思われる。数字の上では（丹青）毎日1館弱の割合で開設され、現在全体では相当な数にのぼり、単に美術館があるか無いかという問題から、いかなる活動をすべきかという、質を問う時代に移行している。

質を高めるということで、企画展やコレクションの充実はもちろん、教育普及施設、美術図書館、視聴覚ライブラリー、レストラン、ミュージアムショップ等をそろえた大規模美術館が各地にできており、利用者にとっての大きな魅力となっている。

一方、中小の館では、これらの設備・機能すべてを充実させることに無理がある。そこで、それぞれの館独自のコレクションや企画、設備に個性を持たせ、独自な展開を図ってゆくこと

が、今後の質を高めることになる。その例をあげてみよう。

現代の作家たちの表現形態のひとつに、ビデオやパソコンなどのハイテク機器を使って映像や音声で表現するメディア・アートやテクノロジー・アートと呼ばれるものがある。主にこれらの作品を展示するための施設としてNTTが推進し、平成9年(1997)4月東京都新宿区にオープン予定の「ICC(インターコミュニケーション・センター)」がある。案内によれば「コミュニケーションというテーマを軸に、科学技術と芸術文化の対話を促進し、豊かな未来社会を構想していくためのミュージアム」としている。ここでの展示活動は「常設展示」と「企画展示」に分けられる。常設展示では現在の最先端のテクノロジーを使った作品を通じ未来に通じる科学と芸術表現の新しい可能性を探り企画展示では、先駆的なアーティストの紹介、時代の動向の回顧、実験的作品の紹介等を行うとともに、従来のジャンルにとらわれない新しいテーマの企画展を開催するという。展示活動の他にも、映像作品の上映、パフォーマンス、ワークショップ、シンポジウムの開催などの多彩な活動を展開予定である。施設の概要は・企画展示室[ギャラリーA]・常設展示室[ギャラリーB]・テーマ展示室[ギャラリーC]・ワークショップ・スペース[ギャラリーD]・シアター・電子図書館等である。

## (2) 生涯学習社会における美術館像

本稿ではこれまで、社会的要請から“人々が、生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価されるような”生涯学習社会を目指す意味を考えた。また生涯学習社会のなかでの美術館の役割や課題、そして具体的な活動状況を見てきた。それらを踏まえて、今後の美術館像をこれまでの考察をもとに簡単にまとめてみたい。

明治期、我が国の近代化のために西欧から制度として移入された「美術館」であるが、種々の課題に取り組み日本独自の形を模索しながら各地域に建設され、現在では活動の質が問われる時代に入ってきている。今後、展覧会の充実はもちろんのこと、地域住民のニーズに沿ったサービス面での対応も望まれ、「開かれた美術館」へむけての活動が必要となる。新たな建設や大型化の波が一段落し、人材の育成、経済的

基盤の確保といった面からの充実も大切である。美術館自身が考え、企画や内容の個性化・多様化が進むであろう。第2章で取り上げたように各館さまざまな美術館教育の試みが行われており、それが現代において社会的役割を担う美術館の存在そのものを問うことに重なってくると思う。

学習施設という点から見た美術館での展覧会は、作品を公開し鑑賞(批評)が行われ、鑑賞者とのコミュニケーションの場をつくり出すものであり、それを支援することが美術館での教育活動のはじめと考えられる。具体的な方法としてはセルフガイドやワークシートの作成、ギャラリートークの実施などが考えられる。

子どもから成人を対象にした、多岐な内容のワークショップをはじめとする学習者参加型の教育活動もさかんになる。また、将来を担う児童・生徒を対象とした、学校と連携しての活動がすすめられるようになるだろう。このことによって“人を育て”美術館を支える現在や未来の観衆・市民の理解を得るのである。

地域住民が美術館でボランティア活動することは学習効果を高めるために必要であり、来館者への学習支援にもなり美術館・ボランティア双方にメリットがある。ここから一歩進んで、市民が主体的に美術館活動に参加し、それを美術館が支援すること、美術や美術館を問うことで文化活動の拠点となってゆくだろう。これもひろい意味での美術の概念によって行われる美術館教育である。このような地道な活動によって、将来地域に無くてはならない私たちの美術館となるのである。

表1 調査年度と協力支援組織の有無

	友の会あり	ボランティアあり
1987年度調査	179 (17.3%)	68 (6.6%)
サンプル数	1032	1031
1992年度調査	174 (19.3%)	71 (8.0%)
サンプル数	901	893
1995年度調査	266 (20.6%)	148 (11.5%)
サンプル数	1291	1291

表2 平成6年度博物館園数および各年度全体数  
(7・3・31)

区分	登録	相当	その他	全体
総合	79	12	43	134
郷土	42	7	413	462
美術	274	32	339	645
歴史	216	69	1142	1427
自然史	31	19	100	150
理工	31	15	110	156
動物園	2	27	47	76
水族館	9	30	32	71
植物園	2	18	59	79
動・水・植	0	15	10	25
合計	686	244	2295	3225

日本博物館協会『博物館研究』平成8年3月

各年度全体数と新館数

平成6年度…全体数3225館[増加のうち新館108館]  
 平成5年度…全体数3105館[増加のうち新館114館]  
 平成4年度…全体数2991館[増加のうち新館124館]  
 平成3年度…全体数2892館[増加のうち新館99館]  
 平成2年度…全体数2803館[増加のうち新館118館]  
 昭和60年度…全体数2499館  
 昭和55年度…全体数2080館

日本博物館協会『博物館研究』

表3 開設博物館総数(1991年度～1995年度)

年度	1995年度	1994年度	1993年度	1992年度	1991年度
館数	293館	310館	371館	309館	258館

丹青研究所『ミュージアム・データNo.34』

註

- 1) ポール・ラングラン著 波多野完治訳『生涯教育入門改訂版』(財団法人全日本社会教育連合会 昭和51年 51ページ)
- 2) リカレント教育  
OECD(経済協力開発機構)が提唱した1970年代の代表的な教育改革構想の一つ。急激に変化しつつある社会において、学習がすべての人に生涯にわたって必要であるという前提に立ち、従来のような人生の初期の一定の年齢で教育を終えるのではなく、生涯にわたり回帰的方法によって教育を受けることができるようにする教育の考え方。

- 3) 北澤憲昭著『眼の神殿』(美術出版社 1989年)
- 4) 谷村晃他編『芸術学の射程』(勁草書房 1995年 221ページ)
- 5) 水戸市役所市長公室文化室『水戸芸術館1983-1993』(平成5年 12ページ)
- 6) 同上(30ページ)
- 7) 同上(84ページ)
- 8) ダニエル・ビュレンヌ展[会期 1996年8月3日～11月10日]  
会期中事業  
8月3日 ダンス・パフォーマンス「オープニング・ファンファーレ」  
8月4日 トーク・ショー「ダニエル・ビュレンヌを囲んで」  
8月6日～10月20日 虹プロジェクト  
10月6・13・20・27日 連続トーク・ショー「今日のアート空間」  
11月3日 ギャラリー・コンサート「2つのミニマル」  
11月10日 ギャラリー・コンサート「フレンチ・エレクトリック」
- 9) 東京都写真美術館『東京都写真美術館概要』(1996年 4ページ)
- 10) 同上(5ページ)
- 11) 世田谷美術館『世田谷美術館』(平成5年)
- 12) 『DOME第30号』(日本文教出版 1997年2月・学生たちが学んでいる博物館学)
- 13) 目黒区美術館『目黒区美術館』(1995年 11ページ)
- 14) 目黒区美術館編『画材と素材の引き出し博物館』(中央公論美術出版 1995年)に詳しい内容が掲載されている。
- 15) 横浜美術館『横浜美術館』(1995年 1ページ)
- 16) 横浜美術館『横浜美術館年報1号/平成元年～3年度』(平成5年 89ページ)
- 17) 同上(115ページ)
- 18) 同上(131ページ)
- 19) 山梨県立美術館『山梨県立美術館10年のあゆみ』(昭和63年)
- 20) 『研究社新英和大辞典第5版』
- 21) 『DOME第19号』(日本文教出版 1995年4月・及部克人[武蔵野美術大学教授]《再び、街から美術館へ、美術館から街へ・・・》)
- 22) ライフデザイン研究所『ミュージアムとのこちよい関係づくり-美術館・博物館の利用に関する調査-』(1993年)

モニター対象アンケート

実施時期：1992年9月

対象：首都圏在住の20～69歳の男女500名  
(有効回収436名)

来館対象アンケート

実施時期：1992年9月～10月

対象：東京都内の美術館の来館者206名

- 23) 谷村晃他編『芸術学の射程』(勁草書房 1995年)
- 24) アミューズ・ヴィジョン研究会『公開シンポジウム 開かれた美術館をめざして』(1996年)
- 25) 美術ボランティア20年誌編集委員会『北九州市立美術館美術ボランティア20年誌』(1994年)
- 26) 宇都宮美術館開館記念プレ・ワークショップ「水ヲアツメル」は1996年7月20日市役所会議室で行われ、ボランティアは参加者の作業の援助や講師の補助をした。
- 27) 丹青研究所「ミュージアム・データNo.32」(1996年)

#### 参考文献・参考資料

ポール・ラングラン、波多野完治訳『生涯教育入門第1部』(財団法人全日本社会教育連合会 平成2年再版)

ポール・ラングラン、波多野完治訳『生涯教育入門第2部』(財団法人全日本社会教育連合会 平成元年3版)

ユネスコ教育開発国際委員会『未来の学習』(第一法規出版昭和50年)

瀬沼克彰『生涯学習化の潮流と対応』(東洋館出版社 1995年)

瀬沼克彰『生涯学習と地域ルネッサンス』(全日本社会教育連合会平成5年)

白石克己他『生涯教育への道(生涯学習テキスト)』(実務教育出版 1987年)

日本生涯教育学会『生涯学習事典』(東京書籍 1990年)

ダニエル・ジロディ『美術館とは何かミュージアム&ミュゼオロジー』(鹿島出版会 1993年)

井出洋一郎『美術館学入門』(明星大学出版部 1996年)

大島清次『美術館とは何か』(青英社 1995年)

長谷川栄『新しい美術館学エコ・ミュージエの実際』(三交社 1994年)

目黒実『チルドレンズ・ミュージアムをつくろう』(ブロンズ新社 1996年)

岩淵潤子『美術館の誕生美は誰のものか』(中央公論社 1995年)

小島英熙『ルーブル・美と権力の物語』(丸善ライブラリー平成6年)

『Inter Communication 15特集 スーパーミュージアム/電子情報時代

の美術館』(NTT出版 1996年)

『美術手帖5特集生きている美術館』(美術出版社 1996年)

『公開シンポジウム開かれた美術館をめざして報告書』(アミューズ・ヴィジョン研究会 1996年)

『街から美術館へ美術館から街へ(日本・ドイツ美術館教育シンポジウムと行動1992)』

(報告書編集委員会)

『ミュージアムとのこちよ関係づくりー美術館・博物館の利用に関する調査ー』(ライフデザイン研究所 1993年)

金子郁容『ボランティア』(岩波書店 1992年)

『月刊世論調査/生涯学習とボランティア活動』(総理府広報室平成6年)

北澤憲昭『眼の神殿/美術受容史ノート』(美術出版社 1989年)

神林恒道他『芸術学ハンドブック』(勁草書房 1990年)

谷村晃他『芸術学の射程ー芸術学フォーラムー2』(勁草書房 1995年)

石川毅編著『総合教科芸術の教科課程と教授法の研究』(多賀出版 1996年)

家村珠代「ニューヨーク近代美術館における教育活動の理念、実践方法及びその歴史」(美術教育学 1991年)

佐藤厚子「今日のアメリカの美術館教育」(美術教育学 1991年)

#### 雑誌

美術館教育研究(美術館教育研究会)

DOME(日本文教出版株式会社)

博物館研究(日本博物館協会)

季刊ミュージアム・データ(丹青研究所)